

現代中国家族像の再検討

——その伝統家族との断絶性及び連続性——

園田 茂人

近年になって、中国の現代家族を対象とした研究成果が陸續と発表されるようになってきているが、この中で解放前の伝統家族との断絶性及び連続性といった文脈から、その全体像を検討しているものは皆無に等しい。

本稿は、家族の持つ構造的・人間関係的特徴と人々の「血縁共同意識」とに注目し、入手しうる限りの資料を用いることによってこの問題を論ずるを目的とする。その結果、「近代家族」的特徴の生成と強固な「血縁共同意識」の残存といった傾向を確認することになる。

I. 序

II. その断絶的側面：「近代的」特徴の生成

III. その連続的側面：強固な「血縁共同意識」の残存

IV. 結語

I. 序

中国の伝統社会において、家族が大きな意味を持っていた点については、多くの中国学者がとくに指摘したところである。こと日本人研究者による研究成果に限っても、中間組織としての宗族の結合が強固である点に注目し、古書漢籍を利用することによってこれを歴史的に把握しようとした清水（1942）や牧野（1980）、多賀（1982）らの研究、また実際に華北農村で行われた中国農村慣行調査や満州における農村実地調査、そしてこれを発展させた仁井田（1952）、大山（1952）らの研究、ひいては中国社会全体が、その社会関係や産業組織、国家機構といっ

た側面で家族的構成を反映していることを指摘した橋（1936）や仁井田（1951）らの研究などがあり、前二者が被説明変数として家族の実相を捉えようとしたのに対し、後者がこれを説明変数として中国社会のもつ家族主義的特性¹⁾を剔出しようとしているといった違いはあるものの、これらすべてが家族をキー概念としている点では共通している。このような傾向は、また中国人研究者自身にも見られた。

しかし、香港・台湾を除く解放後の中国において²⁾、この家族がどのような変貌を遂げたのか、あるいはどの程度変化しないままであるのかについて明確な議論を行った研究例は、管見の範囲では Parish&Whyte（1978, 1984）などごくわずかであり³⁾、しかも断片的な考察にとどまっている。これは、中国で解放後社会学が禁じられたため、解放前の問題意識との間に断絶が生じてしまったこと⁴⁾、また伝統的な家族及び家族主義を絶えず封建遺制とみなし、これを打倒するといった「実践」が重要であると認

知されたために、これを「客観的」に「観察」し、「考察」することが不可能であったといった歴史に起因すると思われる。とはいえ、雷潔瓊を中心にした都市家族研究が六・五計画の重要研究課題の一つとなったことに代表されるように（五城市家庭研究項目組（1985））、徐々にデータが公開されつつある状況にあることも確かであり、解放前との関連性といった文脈からその再検討を行わなければならない段階にきている点については指摘するまでもない。

本稿は、以上の問題状況を踏まえ、現時点で入手可能な限りの資料を用いることによって、現代の中国家族を伝統家族との断絶性並びに連続性といった側面からを考察し、この文脈からその全体像を明確な形で把握することを目的とするものである。

II. その断絶的側面：「近代的」特徴の生成

中国の家族は、1949年の社会主義革命の成功、1953年に始まる一連の合作化・公社化の動き、及び1978年に始まる経済体制改革の実施といった三つの時期を境にして、大きく変動することになった（張琢（1989））。その変化を記述するために、家族を「同居同財」によって定義づけられる個々の「戸」レベルと、これが複数集まって成立する「親族」レベルとに分け、またその構造的特性（主として規模と類型）と、内部における人間関係を分けると、四つのセルができることになる（右図参照）。以下これらの一つ一つについて、その変化の特徴を把握してゆくことにしたい。

	構造的特性	人間関係
戸レベル	1	2
親族レベル	3	4

I-1. 家族規模の縮小化と複合家族比率の低下

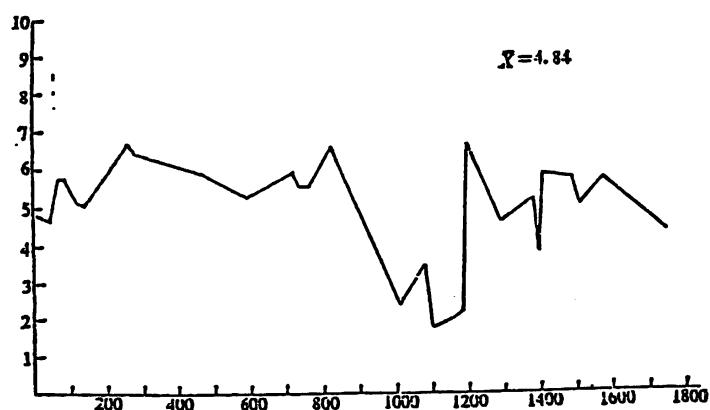
内田（1956）が華北の農村家族に見られる分家の条件を検討することによって明らかにしているように、中国の伝統家族ではその存立のためには「同居」以上に「同財」が重要な条件であるとされていた。しかし社会主義体制への移行に伴い、土地や資本といった生産手段が国有化されることにより、「家産」概念は実質上意味を持たなくなった。また所得も、とりわけ文化大革命を境にして極端なほどに平等に分配されるようになったことも（Parish(1984)）、この趨勢に拍車をかけることになった。これに伴い、「同居」の持つ社会的意味も著しく低下することになった。

これは第一に、一戸当りの平均成員数が解放後に減少するといった傾向を生む原因となった。すなわち、頼澤涵・陳寛政（1980）の計算によれば、中国の伝統社会における一戸あたりの平均成員数が4.84人であり（図1）、また梁方仲（1984：4-11）も4.95人とほぼ同様の値を提示し、こと民国期に限った場合これが平均5.2人であったのが（表1）、1982年の第三回センサスデータによれば、これが4.43人へと減少していることから、家族規模の縮小化傾向が見られるのである。この変化を詳細に見てみると、以下のような特徴が指摘される。

①全国規模で見た場合、一貫して規模の減少化が見られたのではなく、むしろ減少と増加の小刻みなサイクルを伴って、全体として減少する形をとっている（表2）。これが1970年代の後半から一貫して減少傾向を見せるようになるが、その主要な原因は、「一人っ子政策」に代表される計画出産の徹底が徐々に計られつつあることに求められる。

②都市と農村とを比較した場合、1960年代末

(図1) 中国歴代の一戸当り平均人口数の変遷



* 出典：頼澤涵・陳寛政（1980）

(表1) 解放前における家族平均人口

年度	戸数	人口数	戸平均規模	資料の出典
1911	71,268,651	368,146,520	5.17	1934年中国経済年鑑
1912	76,366,074	405,810,967	5.31	前内政部戸口統計
1928	83,855,901	441,849,148	5.27	前内政部戸口統計
1933	83,980,443	444,486,537	5.29	統計便覧
1936	85,827,345	479,084,651	5.38	前内政部報告
1947	86,637,312	463,198,093	5.35	前内政部人口局統計

* 出典：馬俠（1985:101）

(表2) 解放後の都市と農村における家族平均人口の変遷

年度	全国	都市	農村
1953	4.33	4.88	4.30
1954	4.45	4.94	4.40
1956	4.47	4.83	4.43
1959	4.60	5.01	4.51
1961	4.30	4.93	4.20
1964	4.47	5.08	4.39
1971	4.84	4.70	4.86
1972	4.76	4.70	4.77

年度	全国	都市	農村
1973	4.78	4.67	4.80
1974	4.78	4.63	4.80
1976	4.71	4.23	4.79
1979	4.63	4.36	4.67
1981	4.52	4.17	4.58
1982	4.41	3.84	4.57
1983	4.44	4.05	4.53
1984	4.39	4.03	4.48

* 出典：顧鑑塘（1986）

(表3) 地区別に見る解放後の家族規模の変遷

	遼寧	北京	天津	河北	陝西	内蒙古	安徽	江蘇	上海
1949	5.05	4.60	4.75	4.31	5.22		4.28		4.91
1950	5.04	4.59	4.70		4.87				
1951	5.04		4.66		4.84				
1952	5.10		4.62		4.72				
1953	5.03	4.84	4.68	4.35	4.66	4.43		4.19	4.70
1954	5.15		4.69		4.74				
1955	5.15		4.71		4.89				
1956	5.10		4.74		4.85				
1957	5.10	4.71	4.77		4.35				
1958	5.20		4.83		4.38				
1959	5.16	4.81	4.89		5.00		4.42	4.28	
1960	5.16	4.96	4.93		5.04			4.08	
1961	4.89		4.79		4.84		3.94	4.00	
1962	4.82		4.80		4.83			4.00	
1963	4.97	4.80	4.90		4.91			4.02	
1964	5.07		4.98	4.42	4.93	4.65		4.11	4.50
1965	5.13		5.00		4.38			4.17	
1966	5.18		5.00		4.96			4.26	
1967	5.22	4.91	4.98		4.99			4.46	
1968	5.10		4.90		5.06			4.37	
1969	5.07	4.69	4.71		5.09			4.32	
1970	4.95	4.57	4.60		5.13			4.32	
1971	4.96		4.59		5.17			4.33	
1972	4.96		4.59		5.19			4.35	
1973	4.93		4.54		5.19			4.34	
1974	4.91		4.49		5.15		4.71	4.31	
1975	4.86		4.45		5.12			4.28	
1976	4.78	4.34	4.35		5.06			4.23	
1977	4.68	4.26	4.27		5.00			4.16	
1978	4.57		4.22		4.95			4.11	
1979	4.49	4.16	4.23		4.34	4.90		4.08	
1980	4.40		4.17		4.84			4.03	
1981	4.21		4.03		4.74			3.96	
1982	4.11	3.79	3.94	4.28	4.65	4.51	4.60	3.95	3.60

* 出典：『中国人口』（遼寧，北京，天津，河北，陝西，内蒙古，安徽，江蘇，上海各分冊）より作成

まで前者が後者の規模を上回るといった、従来とは全く異なる傾向が見られた(田中(1937: 369))。これは土地改革によって農村で小家族が簇生したのに対し(張琢(1989))、都市は農村からの人口の流入現象に対する対応が遅れ、住宅難が生じたといった原因によるものと思われる⁵⁾。しかしそれ以外の時期では、都市より農村の家族が大規模であるといった従来の傾向との連続性を示している。また、都市と農村いづれにおいても、解放前に比べてその規模は明らかに縮小化に向かっている。

③『中国人口』シリーズ(中国財政経済出版社刊)に記載されている各省・都市レベルのデータを比較してみると、地方による変化の差は若干見られるとはいえ、全体として規模の縮小化を示している点では共通している(表3)。

ところで現時点において、都市(城)－農村(郷)、地域、階層といった軸に沿って家族規模の違いを検討してみると、以下のような特徴を指摘することができる。

①(表2)で既に見たように、農村の家族規模は都市のそれを上回っている。これは、大部分の省・都市でもあてはまる現象であり、その限りでは解放前との連続性を示している。

②上海(3.6人)、北京(3.7人)、天津(3.9人)、江蘇(3.9人)といった比較的生産力の高い地域では家族規模が小さいのに対して、広西、西藏、甘肅、青海、寧夏(全て5.1人)といった生産力の低い周辺地域では家族規模が大きいといった傾向が見られる(馬侠(1987: 104))。これは伝統家族について、その家族規模を主として南北の違いによって説明した田中(1937: 367)の仮説とは必ずしも一致していない⁶⁾。またこれには、地方によって一人っ子政策の適用を受けていない少数民族の比率が異なっていることも関係していると思われる⁷⁾。

③農村家族については、いわゆる万元戸・專業戸の方が一般戸に比べその家族規模が大きいといった傾向が見られるが(趙喜順(1986b: 357))⁸⁾、これは、富農の方が貧農よりも家族規模が大きいといった解放前の傾向と基本的に一致している(Chow(1966: 109), 王旭(1986: 341), 加藤(1935)等)。また都市家族については、裕福な個体戸の家族規模が若干大きいのではないかといった指摘はあるものの⁹⁾、階層カテゴリーを使って家族規模を分析したモノグラフは、現時点では発表されていない¹⁰⁾。

第二に、家族類型で見た場合、核家族の増大と複合家族の減少といった傾向が、都市(表4)と農村(表5)のいずれにおいても見られるようになった。しかしとりわけ核家族化の現象については、以下のような問題も存在している点にも留意しなければならない。

①全ての地域、全ての時代において以上のような現象が見られたわけではない。例えば劉炳福(1987)によれば、1960年と1982年における上海市長春街の戸籍を調べた結果、核家族が減少した反面、直系家族が大幅に増加するといった傾向が見られたという(表6)。また、潘允康・林南(1987=1988: 12-13)は、都市家族では、個々の成員がそのライフ・ステージによって核家族を形成する場合と直系家族を形成する場合とがあり、これが一定の周期を形成していると指摘して、その循環の形態を「U字型循環形態」と呼んでいるが、これらの事例は、単純に近代化の文脈のみから中国の核家族化の趨勢を論じることができないことを示唆するものである(馬有才・潘崇麟(1986))¹¹⁾。

②馬侠(1987: 110)は、1930年代から1940年代にかけての農村の核家族比率は大雑把にいて30%であったと推測しているが、この値と比較すると、地域によっては現在の方が小さな

(表4) 都市における家族構造の変動

	現在の家族類型		婚姻時の実家の家族類型	
	戸数	%	戸数	%
単身者家族	107	2.44	341	6.84
核家族	2,912	66.41	2,948	59.15
直系家族	1,065	24.29	1,124	22.55
複合家族	101	2.30	283	5.68
その他	200	4.56	288	5.78

* 出典：劉英 (1987:85)

(表5) 農村における家族構造の変動 (単位%)

家族類型	解放前 (1940年前後)	1981年
核家族	30	36
直系家族	43	56
複合家族	23	3
その他	4	6
合計	100	100

* 出典：陳玉光・張沢厚 (1986:86)

(表6) 上海市長春街における家族構造の変動

家族類型	1960年		1982年	
核家族	302	65.79%	385	54.77%
直系家族	126	27.45%	245	34.85%
複合家族	6	1.31%	18	2.56%
その他	25	5.45%	55	8.82%
合計	459		703	

* 出典：劉炳福 (1987:116)

値を示しているものもあり（表7）、必ずしも全体の趨勢とは一致していない。

③しかも、都市における核家族化のスピードならびにその現在における比率も、地方によって大きな違いが見られ、その一般化を難しくしている（表8）。

いずれにせよ、これらの数字の変化が示しているように、傍系家族成員をも家産相続の対象としていた伝統中国において多く見られた複合家族は、解放後急速にその存立の根拠を失ってゆくことになったのである。

II-2. 「近代的」家族関係の成立

家族関係の変化については、中国人自身の回顧と記述に頼らなければならないため、その信憑性については問題が残るとはいえ、従来「上の世代の者は下の世代の者に優先し、同世代の

なかでは年長者が最年少者に優先し、男性は女性に優先した」（Lang(1946=1953・54: 29)）とされ、「父権父系的」（蔡文輝（1981：78））或いは「尊々主義的」（福武（1942：365））として特徴づけられる伝統家族における人間関係は、社会主義革命といったドラスティックな変革によって、「平等、民主、和睦、友愛」（潘允康(1986b：151)）によって基礎づけられた「近代的な」家族関係へと急速に変化することになったと言えるであろう¹²⁾。その象徴が家長（当家（dangjia））の存在の否定であるが、以下その具体的な変化について、実証研究が多く行われている夫婦関係に限定して追ってみると、次のような特徴を見いだすことができる。

①婚姻時において、従来のような両親による契約婚といった形態はほとんどなくなり、その一方で、自由恋愛のような完全に自分の裁量に依

（表7）地方間で見られる農村家族構造の違い

地点名	四季美 (北京)	角美 (福建)	上旺 (浙江)	湾頭 (江蘇)	石家庄 (山東)	烽火 (陝西)	安仁 (四川)
核家族	39.6%	27.8%	35.0%	41.8%	35.6%	27.9%	37.8%
複合家族	0%	5.2%	2.5%	2.4%	6.4%	0%	3.3%
直系家族	58.3%	58.6%	53.8%	48.9%	53.7%	72.1%	48.9%
その他	2.1%	8.4%	8.7%	6.9%	4.3%	0%	10.0%

* 出典：馬俠（1985:127）より作成

（表8）地方間で見られる都市家族の核家族比率の違い

	北京 (団結湖)	天津	上海 (張家弄)	上海 (長春街)	上海 (双陽街)	南京	成都
結婚前の家族	58.3%	62.0%	60.8%	54.7%	59.1%	69.3%	57.9%
現在の家族	70.7%	77.9%	61.2%	51.9%	70.2%	70.2%	71.9%

* 出典：張雅芳（1987:184）

存する形態というよりはむしろ友人に紹介してもらおうといった形態の比率が増加しており¹³⁾、総体として比較的自由に配偶者を選択する傾向が強くなってきている(表9)。

②また女性の就学率の増加と社会参加の増大によって、夫婦間の文化的格差が徐々に縮まってきており(表10)、また政府の共稼ぎ政策によって、家計に対する貢献もとりわけ若年層ではヨリ平等なものとなりつつある(図2)。

③これに伴い家事労働の分担も、若年層ほど男女が均等化する傾向を示している(図3)。

④実際に青年の抱いている理想の母親像は、比率の違いこそあれ、理想の父親像とほぼ同じパターンを示しており、他の国々に比べて顕著なほどに仕事重視の傾向を見せている(総務庁青少年対策本部編(1989:15-17))¹⁴⁾。

⑤離婚も最近とみに増加する傾向も見られ(趙子祥他(1984))、伝統的な貞操観念も徐々に薄れつつある。

これら一連の諸変化は、婚姻法の制定や中華全国婦女連合会による一連の運動以上に、特に若い女性の意識の変化によってもたらされたも

(表9) 既婚女性の結婚年代別にみた配偶者選択の変化

結婚の契機	結 婚 年 代							
	-1937	38-45	46-49	50-53	54-57	58-65	66-76	77-82
両親による世話	54.72%	37.23%	31.77%	20.66%	11.72%	3.31%	0.82%	0.94%
親戚による紹介	24.42%	27.84%	27.07%	26.81%	25.10%	22.48%	18.35%	15.79%
友人による紹介	15.33%	23.89%	25.50%	31.21%	35.77%	44.79%	45.65%	50.18%
自由恋愛	4.99%	10.05%	15.21%	19.34%	26.78%	27.93%	34.59%	32.98%
その他	0.53%	0.99%	0.45%	1.98%	0.63%	1.49%	0.59%	0.12%

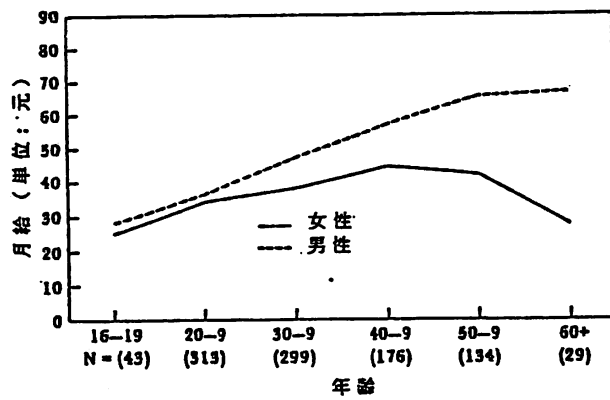
* 出典：劉英(1987:90)

(表10) 夫婦間で見られる文化的格差の変化

夫婦の文化的格差の状況	結 婚 年 代							
	1949以前		1950-1965		1966-1976		1977-1982	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
夫の方が高い	50	48.54	58	39.73	22	43.14	18	21.95
夫婦ほぼ同じ	48	46.60	66	45.20	21	41.18	42	51.22
妻の方が高い	5	4.86	22	15.07	8	15.69	22	26.88
合計	103	100	146	100	51	100	82	100

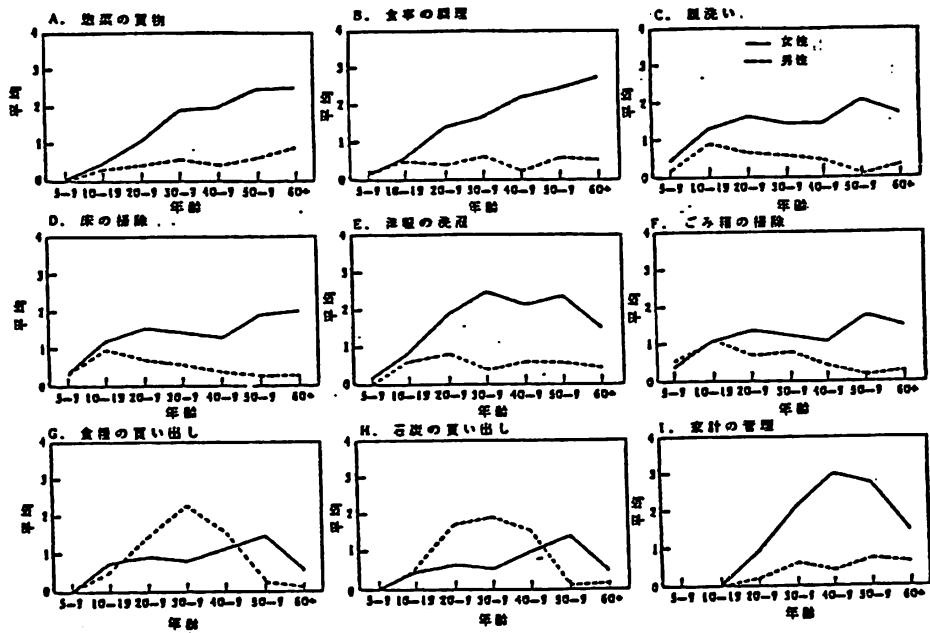
* 出典：李東山(1987:271)

(図2) 年齢別に見た男女の月給の変化



* 出典: Whyte (1984: 218)

(図3) 年齢別に見た男女の家事労働の分担状況



* 出典: Whyte (1984: 224)

のである点については贅言を要さないであろう
15)。

そのほかにも、特に親の側が子どもと必ずしも同居を望まなくなってきたり(潘允康・林南(1987=1988:9))、「一人っ子政策」の導入によって家族が子供中心に動きつつあるといった(辺燕杰(1986:340))、家族関係の平準化を示唆する興味深い傾向が表れつつあるが、本稿では詳論しない。

II-3. 宗族組織の解体化

中国の親族において、従来とりわけ重要な機能を果たしていたのが、「同姓不婚」と「異姓不養」の原則に基づく、父系血縁関係によって構成されていた「宗族(Zongzu)」である。伝統社会においても、とりわけ華北では異民族の侵入等の原因により、既に宗族の勢力が弱体化しつつあったことは指摘されているが、同一姓村の多いとされる華南においても、1950年代になって族産としての義田や祭田、それに血縁統合の象徴であった宗祠や宗譜が国家によって没収されることによって、その存立の基盤を失うことになった(中兼(1980:19),張琢(1989))。この具体的プロセスを追った研究はほとんど見あたらないが、陳支平・鄭振滿(1987)の研究はこの点で大変貴重な情報を提供している。

陳らは1983年、福建省北部の村に清末から1960年代末まで続いた鄒氏家族を調査したが、その内部には5代97人を含む7つの「房(fang)」が見られたという。農業収入が大部分を占め、内部での分業が未発達であった鄒氏は、典型的な「棚民(pengmin)」であったが、族の取りまとめ役であった陳水英の死去により、個々の「房」は「戸」として独立することになった。陳らの分析によれば、このような形態を

60年代末に至るまで維持しえたのは、以下のような原因によるものであった。

①10華里以内には人家がないほどの山奥に住んでおり、天然資源に恵まれていなかった。しかも交通の便が悪く、モビリティが非常に低かった。

②元来宗法勢力が非常に強いといった、歴史的風土を持っていた。

③個々の成員に「孝悌」の観念が強く残っていた。

しかし、このような鄒氏も、内部にあまりに多くの人口を抱えることになり、人間関係が原因となって、結局は分裂せざるを得なかったことからわかるように、「聚族而居」を旨とする宗族は、元来組織的に維持しにくく、しかもモビリティが増大しつつある現在、とりわけ都市の場合には、これを維持しうる物質的条件は存在していないと言わざるをえない。事実夏文信(1987:218)は、五城市家庭調査の結果から、4562名の既婚男子のうち農村から流入してきた者が全体の41.96%、また別の都市から流入してきた者が16.22%を占めているといった事実を指摘し、その宗族成立の基盤に対して否定的な見解を示している。

因みに、Parish&Whyte(1978:171)は、伝統的に宗族意識が強固であった広東人を対象として、宗族結合の原則である同姓不婚の原則が崩壊しつつあることを実証しているが(表11)、このような意識の変化も伝統的な宗族組織の維持を困難にさせている大きな原因となっていると思われる。

II-4. 非宗族関係の相対的重要性の増大

従来宗族は、内部に族のまとめ役であった族長を頭とし、その内部の人間関係は「戸」レベルと同様に、その性格が「片務的」とであるとされるほど強い縦の支配-従属関係を内包するも

(表11) 香港移民に見られる結婚相手の変化

	1949年以前	1950-58	1959-67	1968-74
結婚相手の出生地				
同一村	3 %	21 %	30 %	23 %
同一公社、違う村	47	33	38	42
違う公社	50	46	32	35
(N)	(34)	(48)	(53)	(158)
結婚相手の姓				
同姓	0 %	38 %	44 %	22 %
異姓	100	62	56 %	78
(N)	(5)	(8)	(16)	(55)

* 出典：Parish&Whyte (1978:171)

のであった(清水(1942:396), 農・園田(1988a:19))。しかし、その宗族も生産隊によってその機能が代替されるようになり、また宗族を統率するためにほとんど絶対的な権力を有していた族長も、共産党員を中心とする新しい生産隊の指導者にとって代わられるようになった。そしてこれは、後述する女系血族の重要性の増大とともに、宗族関係が相対的に希薄になる大きな原因となった。

一方、一般的な親族関係については、元来その関係は複雑で、1933年に発表された李景漢(1986:139-140)の河北省定県調査によれば、当時42種類の呼称が区別されていたのが、潘允康(1986b:150)が天津で行った調査の結果、現在そのうちで使われている呼称は26種類へと、依然としてその数は多いとはいえ、確実に減少する傾向が見られるようになった。これは、徐々に親族関係が簡素化していることを示唆するものであるが、その主要な原因は、特にモビリティの高い都市の場合に顕著なように、人間関係のネットワークがすでに親族の範囲を拡大してしまっていることにあると考えられる。例えば夏文信(1987:219)の調査結果によれば、上海では日頃交流のある親族の数

は平均して二戸弱であるというから、日常生活上の欲求充足が親族内で完全に行われるとは到底考えられない。一方農村においても、人民公社化を契機として個々の家族及び生産隊が農業生産の基本単位となることによって、従来ほどには親族関係が重要でなくなったとされている(Whyte(1979:56), Chan, et. al.(1984=1989:39))。実際、農・園田(1988b)が日本と中国の大学生100名を対象にして行った意識調査からは、むしろある局面では日本の親族関係の方が重要であることを示唆する結果さえ得られている。

以上約言すれば、解放後の中国においては、家族はより小規模化・簡素化し、内部の人間関係も平準化するといった、「近代的」特徴を持つようになったと言えるであろう¹⁶⁾。

III. その連続的側面：強固な「血縁共同意識」の残存

以上のような変化を被ってきた現代中国家族も、もちろんのことながら、伝統家族から継承している特徴を見せている。これは端的に、強固な血縁共同意識の残存として表現できると思

われる。

ところで伝統家族において血縁共同意識が強く固であった点については多くの論者によってつとに指摘されており、また、現在の東南アジアの華僑社会においてその傾向が根強く見られる点についても、内田(1982)やHeng(1988)らが問題としているところである。しかしその開放体制以前の状況については、例えば農地改革の際、特に宗族勢力の強固な華南地方では、その土地の分配と「階級教育」が血縁関係によって大きな影響を受けていたこと(川井(1987))、政治的なエリート集団内では特にネオポティズムの傾向が強く見られたこと(伊藤他(1983))、また文化大革命も「出身血統主義批判」(加々美(1986))といった色彩を持っていたとはいえ、結

局最後まで保身の手段として血縁的結合関係が最良のものと認知されていたこと(Madsen(1984))等、断片的な指摘があるにすぎない。しかもこの問題が、中国社会の政治体制の問題と大きく絡んでいるため、これに関する公開資料には限りがある。そこで本稿では、特に開放体制以降に時期を限定しつつ、前節で用いた四つのセルを援用することによって、その連続的側面の背後に存在している血縁共同意識の顕現について論じることにした。

III-1. 安定的な直系家族比率

前節で述べたように、核家族比率は上昇し複合家族比率が低下するといった傾向が見られるとはいえ、直系家族比率が比較的安定している

(表12) 都市と農村における理想家族形態の違い
A. 都市の場合

理想とする家族形態	未婚		既婚	
	人数	比率	人数	比率
四世同堂	2	6.06%	3	8.33%
三世同堂	2	6.06%	4	11.76%
両親と食住を共にする	13	39.39%	18	52.92%
両親と住のみ共にする	3	9.09%	1	2.94%
両親と食のみ共にする	1	3.03%	0	0%
両親と完全に別居	11	33.33%	7	20.59%
その他	1	3.03%	1	2.94%

* 出典：陳谷松・趙徳華(1987:294)

B. 農村の場合

理想とする家族形態	湖南省の農村青年	四川省の農村青年
核家族	25.02%	81.1%
一方の親と同居	16.22%	87.71%
両方の親と同居	34.65%	18.9%
複合大家族	24.1%	(男) (女)

* 出典：方向新(1984:10)

といった特殊中国的な状況も見過ごすことはできない。

すなわち、都市と農村とでは、子供の世代の理想とする家族形態として直系家族を挙げる比率に大きな違いが見られるとはいえず（表12）、実際にはその双方において直系家族の比率がほぼ変化していないか、あるいは場所によってはこれが上昇しているといった現象が見られるのである¹⁷⁾。

この点についての中国人研究者の説明としては、児童保育機関や老人福祉施設などの社会保障制度の不備（劉英（1986：318））、両親を扶養することを美德と見なす伝統の存在（中国社会科学院青少年研究所（1984：42））、共稼ぎ夫婦の増加と家事負担の増大、並びに若年夫婦の老人夫婦への依存度の増大（潘允康・林南（1987 = 1988：13 - 14））、また特に農村の場合には生産責任制の導入（趙喜順（1986 a））などがあるが、いずれにせよその根底に、費孝通が解放前の家族について指摘しているような（Fei（1939：31））、子供を「養老保険」として見る伝統的な観念とは異なった、新しい家族関係を媒介とした強固な相互扶助意識を読み取ることは容易であろう¹⁸⁾。

III - 2. 家族内労働力の重要視

「農民は人間を手段としながら、その人間の労働力をできるだけ安価に、できるならただで、しかもその供給を常時断たぬようにする。そしてそれに最もあつらえ向きなものとして家族労働に目をつけてくる」（仁井田（1952：27））とされているように、中国では伝統的に、血縁関係を媒介とした家族内労働力は非常に重要なものとして認知されてきた。この点に関しては、上記で見てきた諸変化にも拘らず、現在でも様々な局面で根強く残っていると言わざるをえない。

例えば農村では、人民公社の解体と生産責任制の導入に伴って、いわゆる「家族経営」が復活しており、そこでは家族内労働力が有効に活用されている点について様々な報告がなされている（阪本（1985））。中でも万元戸の場合、血縁関係を軸にした協働体系を作り上げており、王格（1984）の調査によれば、38戸の調査対象のうち30戸までが成功の最大の理由を「家族の団結」に求めており、事実内部の関係は概ね良好なものとなっている（表13）。しかも、その経営資金の多くは、中国農業銀行といった公的機関に依存することなく、むしろ家族内部及び何らかの血縁関係を持つ民間の貸借によって調達されているといった傾向さえ見られる（中共中央書記処研究室経済組編（1986：329））。

また最近都市で増加傾向にある「个体戸」の経営についても、林氏三兄弟のように、兄弟といった血縁関係を基礎とすることによって盤石な「个体戸」経営を行っている事例が多く報告されている（胡国華等（1988：154））。また前述の、都市家族で見られる老後の扶養や家事負担に関する世代間の分業の存在も、このような傾向を表していると言える。

このように、家族内労働力を重要視する傾向は、後述する親族レベルにおける強固な家族間ネットワークの存在と同様に、中国現代家族を特徴づけている大きな要素となっているのである。

III - 3. 一部地域に見られる疑似宗族組織の再生

前節では宗族組織が解体したことを指摘したが、開放体制に伴って、特に華南地方に多くの華僑が里帰りするようになり、彼らが中心になって族譜の編纂や宗祠の再建が行われるといった、従来にはない新しい動きが見られるようになったと

(表13) 万元戸に見られる人間関係

	全体	夫婦	親子	嫁姑	兄弟	祖父母
良 好	84.2(32)	97.3(36)	76.3(29)	77.3(17)	72.2(26)	96.7(29)
普 通	13.2(5)	2.7(1)	23.7(9)	18.2(4)	22.2(8)	3.3(1)
悪 い	2.6(1)	0(0)	0(0)	4.5(1)	5.6(2)	0(0)
合 計	100(38)	100(37)	100(38)	100(22)	100(36)	100(30)

* 出典：王格 (1984:26)

(表14) 家族の種類から見た協働のパートナー

	夫側の三代以内の家族	夫側の三代以外五服以内の家族	隣近所の仲間	一般の友人	妻側の実家	親戚の家族	女婿の家族	姉妹の嫁ぎ先の家族	あい婚の家族
戸 数	127	110	125	62	66	24	20	27	6
%	22.4	19.4	22.0	10.8	11.7	4.2	3.5	4.8	1.1

* 出典：王思斌 (1987:27)

(表15) 農業及び工業・副業で見られる協働の形態

	親族間での協働		非親族間での協働	
	組 数	%	組 数	%
役畜・農具の買い入れ	168	73.7	60	26.3
工業・副業における生産	27	57.4	20	42.6

* 出典：王思斌 (1987:29)

いう(張琢(1989))。これをどう捉えるかは意見の分かれるところであろうが、原則として土地の個人所有が認められず、しかも若い世代には宗族意識が希薄になっている現状を考えると、完全に伝統的な宗族組織の復活ではなく、むしろ吉原(1988)が香港のケースで指摘しているような、「ボランティア・アソシエーション」的な特徴を持った、宗親会的組織の復活を予想するほうが、筆者には自然のように思われる。しかし、これはとりもなおさず、宗族意識が完全に消失したのではなく、むしろ族産の所有が認められるなどの何らかの契機によって、再び宗族組織が再生する可能性を示唆するものであり、その意味でも潜在的な血縁共同意識にはなお根強いものがあると言わなければならない。

III-4. 強固な家族間ネットワークの存在

農村家族において、依然として血縁関係が協働の重要な契機となっている点については前述の通りであるが、これを実際の農村調査の結果を踏まえて検討したものとして王思斌(1987=1989)の研究がある。即ち王は、河北省泊頭市の8つの郷鎮、726戸の農家を対象にして調査を行ったが、その結果、すべての家族が何らかの形で協働を行っていること、またそのパートナーとして親族を選んでいるものが全体の67.1%を占め、しかも夫側と血縁関係を持つ三代以内或は五服以内の家族との協働も62.4%を占めていることをつきとめた(表14)。これに伴い配偶者の選択も、従来に比べて地理的に近い範囲から行われるようになり、その婚姻圏が狭くなってきたが¹⁹⁾、これは、親族の構造的・人間関係的変容にも拘らず、血縁共同意識が依然として強固であることを示すものである。

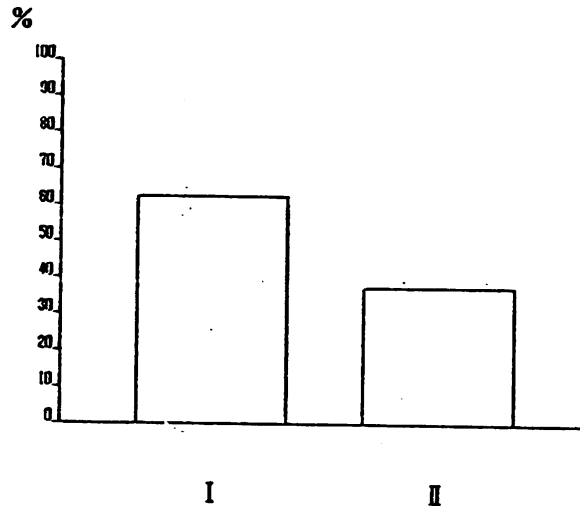
ところが王は、ヨリ高度な技術と大量の資本を必要とする工業・副業の生産活動の際には、

能力のない血縁者を労働者として抱えることのリスクを回避しなければならず、また非血縁者である行政幹部や他の経営者との関係が相対的に重要になってきているため、農業生産に比べて親族関係がさほど重要ではなくなっており(表15)、しかも従来の男系血縁のみを重視する傾向が徐々に弱まり、その分だけ女系血縁が重要になっているといった現象が見られることを指摘している。また張琢(1989)も、商品経済の発達した浙江省温州では、多くの郷鎮企業の経営者が血縁者による「食いつぶし」を免れるため、最近になって企業収益の多くを外省企業に投資することによって利益を拡大させようとする傾向が見られようになったことを指摘しているが、これらの事態は、商品経済が広がりつつある農村の経済構造の変化が、血縁共同意識を徐々に経済関係を中心とした目的合理的性格を持つものへと変形させつつある傾向を示唆しており、興味深い。

一方都市の場合、国営企業の従業員比率が高いことから推測されるように、農村ほど家族関係を直接生産組織の構成原理とはしておらず、また消費の面でも核家族が基本的に独立した単位となっているにも拘らず(夏文信(1987:223))、そこに農村家族と同様の強固な血縁共同意識に支えられた緊密な家族間ネットワークが存在している点については、多くの中国人研究者が一樣に指摘しているところである。例えば潘允康・林南(1987=1988:15-16)は、①就職口の世話(図4)、②家庭内における日常生活上の必要性、③精神的な慰め、といった三つの側面に注目して、そこに強いネットワーク関係が見られるとしており、これを中国の都市家族の特徴の一つとして把握しているほどである。

これは当然のことながら、「門当戸対」²⁰⁾が

(図4) 天津市住民の職業選択の手段



説明) I. 親族関係の援助を通じて II. 友人その他の関係を通じて

* 出典：潘允康・林南（1988：16）

従来のような社会的エリート層のみならず社会一般で見られるようになったことに象徴されるような（潘崇麟・馬有才（1987））、女系血縁関係が男系血縁関係の相対的重要性の減少を補完する機能的代替物となってきている傾向とも無関係ではない。事実、配偶者選択の際に「海・落・空（海外との関係がある、政策に関与している、空いている部屋を持っている）」といった経済的条件が、従来以上に重要視されるようになってきたという（馬有才・蒙晨（1986：129））。

また筆者が1988年2月に福建省石獅市で行ったヒアリングでも、郷鎮企業の「経営者」として服装品や雑貨等の商売を行っている者の、実に90%以上が海外華僑との血縁関係を持っており、資本の貸借から品物の搬入まで多くの点で恩恵を受けていることが判明しているなど²¹⁾、戸レベル・親族レベルにおける血縁関係を経済的関係として利用する傾向は、多くの局面

で見られている。その意味では晨と園田（1989a）が、その876人の労働者を対象にした調査の結果として、多くの企業では入社の際に国家による配分がなされ（59.0%）、また同じ職場に親戚がいる比率は低いけれども（22.2%）、調査対象者の多く（34.1%）が企業内における昇進の条件として最も重要なものを「親戚を上司として持っているか否か」を挙げていること、また自分の親戚が企業管理者となっている工場で働きたいと思っている者が多い反面で（38.9%）、逆に自分が企業管理者の立場にあれば親戚の面倒を見たいと思う者が少ない（17.6%）といった傾向が見られることを指摘しているのは、大変示唆的である。

このように、現在においても血縁関係はアイデンティティーの対象以上のものと認知されており、これがとりわけ資源流通の回路として社会で一定の機能を果たしていると言えるであろう。これには、解放後も脈々と続いてきた中

国社会の血縁主義的風土と同様に、経済体制改革の実施や経済活動の「自由化」といった資本主義的要素の導入も、大きな影響を与えているものと考えられる。

IV. 結語

以上中国の現代家族像を、主としてその伝統家族との断絶性と連続性といった側面から検討を加えてきた。これから、その「近代」的特徴の生成に見られる家族内部の縦の支配-従属関係の消滅と強い横の共同関係の成立、及び強固な「血縁共同意識」の残存に支えられた、家族関係の目的合理的再編成の過程を見いだすことができるであろうが、筆者は以前このような状況を踏まえて、現代中国の社会構成原理を「関係主義(guanxi-ism)」として定式化したことがある(園田(1988 a))。

ところでこのような背景から誕生した「関係主義」が、現在の現代化政策にあって、ちょうど日本で「日本の経営」が問題とされたような形でその促進要因となることになるのか、それとも、解放前の中国の近代化を論じる際にLevy(1953)らが指摘にしたように、結局はその障害要因となってしまうのか、予断を許さない状況にある。

農村家族研究が七・五計画の重点研究課題の一つとなったのを受けて、中国社会科学院が山東省に基地を設けて本格的な調査を開始し、また党中央が第二段階の農村発展モデル地区として内陸部の安徽省阜陽市を選び、そこで見られる「発展」と「関係主義」がどのように結合しているかに注目し始めた現在²²⁾、我々は中国の今後注目し続ける必要があるだろう。

[付記] 本稿は、1988年10月10日の第61回日本社会学会一般報告における配布原稿(「現代中国における『家』と『家族主義』」)をもとに、これを加筆・修正したものである。本稿を掲載するにあたり、奥村隆氏(東京大学)及び尾中文哉氏(東京大学)に貴重なコメントを頂いた。特に記して謝意を表したい。

註

- 1) 「家族主義」とは本来多義的な概念であり、Wong(1985)はこれをネオポティズム、温情主義、資源の家族所有といった三つの要素から構成されるものであるとしているのに対し、楊懋春(1981)は国民性との関連から平和志向、勤勉性、「孝」の強調といった三つの特性を指摘しているなど、論者によってその捉え方にも大きな差が見られる。その意味で、とりわけ日本と中国といった異なった家族的伝統をもつ「家族主義」を論ずる場合には、その内容を慎重に吟味しなければならない(農・園田(1988 a))。
- 2) 香港ならびに台湾における家族研究の基礎文献については、李亦園・莊英章(1987)を参照のこと。
- 3) 日本においては、解放後の家族変動を論じたものとして松戸(1985)がある程度で、管見の範囲では一次調査データを用いて分析を行った例はない。この点については、アメリカの場合も同様のものである(Hareven(1987))。因みに、前掲のバリッシュとホワイトの研究も、香港へ移住してきた中国人(主として広東人)を対象にして行ったものであるから、サンプルは偏りのあるものとなっている。
- 4) 現在の家族研究の最高水準を示していると思われる潘允康・林南(1987 = 1988)の研究でさえ、この問題を比較的簡単にしか扱っていない。なお

問題意識の断絶性については、拙稿（園田（1988 b））を参照されたい。

- 5) 住宅難の有無は、家族規模を考える際の大きな要因となると思われる。例えば胡煥庸(1987 : 295)は、上海において市区よりも郊県の方が解放後一貫して家族規模が大きいことが指摘し、これを市区における慢性的な住宅難に起因するものであると考えているのに対し、一方で戴世光(1986)は、成都等の四つの都市における家族規模について、第三回センサスデータの値を追跡調査してみたところ、別居の理由として住宅難を挙げている家庭が全体の40%近くおり、これを「戸」ではなく「家族」の成員としてカウントした場合（潘允康(1986 b)）、家族成員数はセンサスデータの値よりも高い値を示すことを突き止めた。このように、住宅難が家族規模の増大をもたらす場合とその減少をもたらす場合が考えられ、この点で今後の詳細な研究が待たれる。
- 6) しかも、馬侠(1987 : 107)の調べた範囲では、1947年時点でも、例えば広州の一戸当り平均人口数が8.04人と、北京(4.87人)や天津(5.11人)といった華北の大都市に比べてもはるかに大きな値を示しており、地域性からの一般化は非常に困難であると言わざるをえない。
- 7) 例えば宋迺工(1987 : 377)は、1982年時点で漢族の一戸当りの平均人口数が4.516人であったのに対して、蒙古族が5.023人、タタール族が4.958人であったと指摘しているが、これはその傍証たりうるであろう。
- 8) これと一見逆の趨勢を示しているものとして、甘肅省の農村家族の規模を調査した張雲(1986 : 351)の研究がある。しかし詳細に検討してみればわかるように、この研究が扱っている裕福さの度合は成員一人当りの収入であって、必ずしも家族全体の裕福度を表すものとはなっていない。むしろ、一戸当りの平均所得が非常に平均化している

といった背景があるために、裕福な家族であればあるほど小規模化しているように見えると解釈するのが正しいように思われる。また、子供一人の家族とそれ以上の家族の一人当りの純収入を比較して、前者の方が裕福であることを示す文献もあるが（国家統計局農村調査総隊(1987 : 36)）、これも前出の場合と全く同様に考えることができるであろう。

- 9) この点は晨光氏の御教示による。
- 10) 子供に対する生育観の違いを文化的な程度の違いによって分析した例としては、張子毅・楊文他(1982)の研究がある程度で、しかもこれは文化的に高ければ高いほど欲しい子供の数が減少している傾向が見られることを指摘するにとどまっております、実際の家族規模との関係については何ら言及していない。なお、中国における階級・階層研究は現在進行中で、徐々にその成果が発表されつつある状況にある。詳しくは拙稿（園田(1989)）を参照のこと。
- 11) 伝統中国においても、基本的に直系三代代によって構成される「漢型家族」と、これに傍系を含んだ「唐型家族」の二類型が存在し、その双方が様々な条件によって拘束されつつ歴史に登場してきたことを指摘するものさしている（杜正勝(1988)）。このような観点からすれば、複合家族の衰退が必ずしもその「近代化」を意味するものではないと言わなければならない。
- 12) もちろん、Stacey(1983)が「社会主義的家父長制」として指摘したように、従来の家父長制的要素が残存し、これが現在男女の賃金格差や女性の「二重負担」として社会問題となっていることも確かである。
- 13) このように、自由恋愛比率が急激に増加していないのは、直系家族比率が安定しているのと同様に、社会主義革命といったラディカルな変革と人々の意識が完全に一致していないことを示唆するも

のと思われる。

- 14) とはいえ、両親に対しては厳しい存在であるべきだとする意見も多数を占めており、他の国々とは全く異なった傾向を示している。その意味では、親子関係には依然として強い縦の関係が存続しているとも考えられる。
- 15) 例えば張萍(1988 : 26)が1986年に北京の243名の女子大学生を対象にして行った調査の中で、「女として一番大切なものは何か」との問いに対して、回答者のうち家庭と答えたものが全体の16%にすぎず、独立(49%)、出世(19%)といった回答を下回ったといったことから、女性の意識の変化を読み取ることができよう。
- 16) 以上で検討してきた家族の変容については、台湾についてもほぼ同様に当てはまる。この点については、1977年に専門家を対象にしたアンケート調査を行った朱岑樓(1986 : 260 - 262)に詳しい。
- 17) 都市家族については、潘允康(1986 a)の指摘するように、4世代ないしそれ以上の世代によって構成されている家族が、徐々に3世代へと収斂しているために直系家族の比率が安定しているのであって、別に核家族化の趨勢と矛盾しているわけではない。
ところが農村家族については、この点についての解釈は依然として一定しておらず、今後の研究

の展開が待たれるところである。

- 18) 孫本文(1943 : 81)は、中国の伝統家族で相互扶助のシステムが非常に発達していた点を指摘し、これを西洋の家族との対比から中国伝統家族の持つ優れた特徴のうちの一つであると論じている。
- 19) 同様の傾向は、華南でも見ることができる(Chan et.al. (1984 = 1989 : 238))。
- 20) 「門当戸対」とは、婚姻の際に男性側の家族と女性側の家族の、家産によって表象される双方の「格」がほぼ一致するものでなければならない、とする中国の慣例を示している。伝統家族における「門当戸対」の状況については、仁井田(1952 : 110 - 111)を参照せよ。
- 21) このように日常的に血縁関係を利用している様子は、Batterfield(1982 = 1983)ならびに船橋(1983)に詳しい。また我々が行った、山東省の農村建築隊を対象にしたヒアリングの結果から、村営・国営の規模に達しない小規模の農村建築隊の多くは、経営陣を血縁者によって形成しており、中にはなるべく多くの生産機能を内部で保有することによって、政治的動揺や官僚からの「収奪」に耐えうる「独立王国」を作りつつあるものさえ存在していることが判明している(晨・園田(1989 b))。
- 22) これは、張琢氏が1988年6月21日、東京大学文学部で行った講演の際に指摘したものである。

文 献

- Batterfield, F., 1982, *China: Alive in the Bitter Sea* =1983, 佐藤亮一訳, 『中国人』, 時事通信社。
- 辺燕杰 (Bian Yanjie), 1986, 「試論我国生子女家庭内部結構和關係的基本特徵」, 《社会学研究》編輯部編, 『社会学紀程 1979-1985』, 中国展望出版社所収。
- 蔡文輝 (Cai Wenhui), 1981, 『社會學與中國研究』, 東大圖書公司。
- Chan, A., Madsen R., & Ungar J., 1984, *Chen Village*, The University of California Press = 1989, 小林弘二監訳, 『チェン村』, 筑摩書房。
- 陳谷松・趙德華 (Chen Gusong・Zhao Dehua), 1987, 「中国家庭凝聚力剖析」, 劉英・薛素珍編, 『中国婚姻家庭

- 研究』, 社会科学文献出版社所収。
- 晨 光 (Chen Guang)・園田茂人, 1988a, 「中国と日本の伝統的社會關係—その産業化に対する影響との関連から—」, 『中国研究月報 484』, 9-24 頁。
- , 1988b, 「關於大学生的生活和意識的中日比較調查」(未發表)
- , 1989a, 「中国企業の直面する勞使關係の諸問題—北京市・泰安市における意識調查の事例から—」, (『季刊 中国研究』第 15 号掲載予定)
- , 1989b, 「建築企業に見られる傳統的社會關係—日中比較の視点から—」(未發表)
- 陳玉光・張沢厚 (Chen Yuguang・Zhang Zehou), 1986, 『中国人口結構研究』, 山西人民出版社。
- 陳支平・鄭振滿 (Chen Zhiping・Zheng Zhenman), 1987, 「浦城縣洞頭村”五代同堂”調查」, 傅衣凌他編, 『明清福建社會与鄉村經濟』, 厦門大學出版社所収。
- Chow, Y-T, 1966, *Social Mobility in China — Status Careers Among the Gentry in a Chinese Community —*, Atherton Press。
- 戴世光 (Dai Shiguang), 1986, 「1982 年我国成都等四個城市居民家庭規模的統計分析」, 『社會研究』第 2 期, 67 - 76 頁。
- 杜正勝 (Du Zhengsheng), 1988, 「編戶齊民—傳統的家族与家庭」, 姜義華等共編, 『港台及海外學者論中国文化 <上>』, 上海人民出版社所収。
- 方向新 (Fang Xiangxin), 1984, 「試論農村家庭結構的發展趨勢」, 『社會』第 4 期, 9 - 11 頁。
- Fei, X-T, 1939, *Peasant Life in China: A Field Study of Country Life in the Yangtze Valley*, Dutton。
- 船橋洋一, 1983, 『内部—ある中国報告—』, 朝日新聞社。
- 福武直, 1942, 『中国農村社會の構造』, 東京大學出版會。
- 顧鑑塘 (Gu Jiantang), 1986, 「試論中国家庭戶的数量和規模」, 『人口与經濟』第 6 期。
- 国家統計局農村調查總隊 (Guojia Tongjiju Nongcun Daiocha Zongdui), 1987, 『中国農民收入研究』, 山西人民出版社。
- Hareven, T.K., 1987, “Reflections on Family Research in the People's Republic of China”, *Social Research* Vol.54, No.4 pp.663-689。
- Heng, P.K., 1988, *Chinese Politics in Malaysia: A History of the Malaysian Chinese Association*, Oxford University Press。
- 胡國華 (Hu Guohua) 等, 1988, 『多色調的中国個體經營者』, 北京經濟學院出版社。
- 胡煥庸 (Hu Huanyong), 1987, 『中国人口 上海分冊』, 中国財政經濟出版社。
- 伊藤喜久藏他, 1983, 『中国のパワーエリート像』, 有斐閣。
- 加々美光行, 1986, 『逆説としての中国革命』, 田畑書店。
- 加藤 六蔵, 1935, 『満州の農民生活—農村実態調査報告—』, 満州事情案内所。
- 川井 伸一, 1987, 「土地改革にみる農村の血縁關係」, 小林弘二編『中国農村變革再考—伝統農村と變革—』, アジア經濟研究所所収。
- 賴澤涵・陳寬政 (Lai Zehan・Chen Kuangzheng), 1980, 「我國家庭形式的歷史与人口」, 『中國社會學刊』第 5 期, 25 - 39 頁。

- Lang, O., 1946, *Chinese Family and Society* = 1953・54, 小川修訳, 『中国の家族と社会』, 岩波書店。
- Levy, M.J.Jr., 1953, "Contrasting Factors in the Modernization of China and Japan", *Economic Development and Cultural Change*, Vol.2, III, pp.167-197。
- 李東山 (Li Dongshan), 1987, 「家庭生活方式与夫婦關係」, 劉英・薛素珍編, 前掲書所収。
- 李景漢 (Li Jinghan), 1986, 『定縣社會概況調查 (重印本)』, 中国人民大学出版社。
- 李亦園・莊英章 (Li Yiyuan・Zhuang Yingzhang) 編, 1987, 『中國家庭之研究論著目錄』, 漢學研究中心編印。
- 梁方仲 (Liang Fangzhong), 1984, 『中国歷代戸口、田地、田賦統計』, 上海人民出版社。
- 劉炳福 (Liu Bingfu), 1987, 「我国城市家庭結構的現狀与發展趨勢」, 劉英・薛素珍編, 前掲書所収。
- 劉英 (Liu Ying), 1986, 「我国城市家庭結構形態的变化」, 《社会学研究》編輯部編, 前掲書所収。
- , 1987, 「中国城市家庭的發展与变化」, 劉英・薛素珍編, 前掲書所収。
- Madsen, R., 1984, *Morality and Power in a Chinese Village*, University of California Press。
- 牧野 巽, 1980, 『牧野巽著作集3 近世中国宗族研究』, 御茶の水書房。
- 松戸 庸子, 1985, 「現代中国家族の動向」, 『現代社会学 19』, 128 - 134 頁。
- 馬 俠 (Ma Xia), 1985, 「農村家庭結構的變遷」, 『社会学与人口問題』, 天津人民出版社所収。
- , 1987, 「中国家庭戸規模和家庭結構分析」, 國務院人口普查办公室・国家統計局人口統計司編, 『中国第三次人口普查資料分析』, 中国財政經濟出版社所収。
- 馬有才・潘崇麟 (Ma Youcai・Shen Chonglin), 1986, 「我国城市家庭結構類型變遷」, 『社会学研究』第2期, 108 - 116 頁。
- 馬有才・蒙 晨 (Ma Youcai・Meng Chen), 1986, 「經濟体制改革与婚姻家庭的变化」, 何建章編, 『經濟体制改革与社会變遷』, 人民出版社所収。
- 中兼和津次, 1980, 「人民公社とコミュニティ」, 嶋倉民生・中兼和津次編, 『人民公社制度の研究』, アジア經濟研究所所収。
- 仁井田 陸, 1951, 『中國の社會とギルド』, 岩波書店。
- , 1952, 『中国の農村家族』, 東京大学出版会。
- 大山 彦一, 1952, 『中国人の家族制度の研究』, 関書院。
- 潘允康 (Pan Yunkang), 1986a, 「試論我国城市核心家庭及其社会意義」, 《社会学研究》編輯部編, 前掲書所収。
- , 1986b, 『家庭社会学』, 重慶出版社。
- 潘允康・林 南 (Pan Yunkang・Lin Nan), 1987, 「中国現代城市家庭模式」, 『社会学研究』第3期 54 - 67 頁 = 1988, 園田茂人訳, 「現代中国における都市家族の形態 - 天津市第三次家庭調査の事例から -」, 『中国研究月報』11月号, 1 - 20 頁。
- Parish, W.L., 1984, "Destratification in China", in Watson, J.L. (ed), *Class & Social Stratification in Post-Revolution China*, Cambridge University Press
- Parish, W.L. & Whyte, M.K., 1978, *Village and Family in Contemporary China*, The University of Chicago Press。
- , 1984, *Urban Life in Contemporary China*, The University of Chicago Press。
- 阪本 楠彦, 1985, 『中国農民の挑戰』, サイマル出版会。

- 潘崇麟・馬有才 (Shen Chonglin・Ma Youcai),1987,「試論婚姻的'門當戶對'問題」,劉英・薛素珍編,前掲書所収。
- 清水 盛光,1942,『支那家族の構造』,岩波書店。
- 総務庁青少年対策本部編,1989,『世界の青年との比較からみた日本の青年—世界青年意識(第4回)報告書』,大蔵省印刷局。
- 園田 茂人,1988a,「中国的<關係主義>に関する基礎的考察」,『ソシオロギス 12』,54-67頁。
- ,1988b,「解放前の社会学に関する意識と知識—南開大学における調査から—」,『日中社会学会会報』創刊号 41-47頁。
- ,1989,「中国の階層研究」,『理論と方法』,第5号,143-152頁。
- 宋迺工 (Song Naigong),1987,『中国人口 内モンゴ分冊』,中国財政經濟出版社。
- Stacey, J., 1983, *Patriarchy and Socialist Revolution in China*, University of California Press.
- 孫本文 (Sun Benwen),1943,『現代中國社會問題(第一冊)』,重慶商務印書館。
- 橋 樸,1936,『支那社會研究』,日本評論社。
- 多賀 秋五郎,1982,『中国宗譜の研究』,日本學術振興會。
- 田中 忠夫,1937,「支那氏族制の崩壊過程と現代支那農家の大きさ」,『支那經濟の崩壊過程と方法論』,学芸社所収。
- 内田 直作,1982,『東南アジア華僑の社會と經濟』,千倉書房。
- 内田 智雄,1965,『中国農村の分家制度』,岩波書店。
- 王 格 (Wang Ge),1984,「農村萬元戸、專業戸家庭關係的調査」,『社会』第4期,26-27頁。
- 王思斌 (Wang Sibin),1987,「經濟体制改革對農村社會關係的影響」,『北京大學學報哲學社會科學版』第3期 26-34頁 = 1989,園田茂人訳,「經濟体制改革と農村の社會關係」,『日中社会学会会報』第2号,18-30頁。
- 王 旭 (Wang Xu),1986,「安徽鳳陽農村家庭剖析」,中国婚姻家庭研究会編,前掲書所収。
- Wong, Siu-lin, 1985, "The Chinese family firm: A model", *The British Journal of Sociology*, Vol.36, No. 1, pp.58-72.
- 五城市家庭研究項目組 (Wu Chengshi Jiating Yanjiu Xiangmuzu),1985,『中国城市家庭—五城市家庭調查報告資料匯編』,山東人民出版社。
- Whyte, M.K., 1979, "Family Change in China", *Issues and Studies*, July.
- , 1984, "Sexual inequality under socialism: the Chinese case in perspective", in Watson, J.L.(ed), *op.cit.*
- 夏文信 (Xia Wenxin),1987,「家庭網」,潘允康主編,『中国城市婚姻与家庭』,山東人民出版社所収。
- 楊懋春 (Yang Maochun),1981,「中國的家族主義與國民性格」,周陽山編,『中國文化的危機與展望—當代研究與趨向』,時報文化出版公司所収。
- 吉原 和男,1988,「移民都市のボランティア・アソシエーション—香港の宗親會と同郷団体」,末成道男編『文化人類学5 特集—漢族研究の最前線—台湾・香港』,アカデミア出版會所収。
- 張 萍 (Zhang Ping),1988,「中国女性の現状と問題」,『中国研究月報』6月号,25-30頁。

張雅芳 (Zhang Yafang),1987,「城市家庭結構的變化」,劉英・薛素珍編,前掲書所収。

張雲 (Zhang Yun),1986,「甘肅省農村家庭規模的演變」,中国婚姻家庭研究会編,前掲書所収。

張子毅・楊文 (Zhang Ziyi・Yang Wen) 他共著,1982,『中国青年的生育意願—北京、四川兩地城鄉調查報告』,
天津人民出版社。

張琢 (Zhang Zhuo),1988,「關於中国家庭和宗族的幾個問題」 = 1989,園田茂人訳,「中国の家族と宗族に
関する諸問題」,『思想』(掲載予定)

趙喜順 (Zhao Xishun),1986a,「從社会学角度看家庭承包責任制—兼論農村家庭結構職能的变化」,《社会学研究
》編輯部編,前掲書所収。

————,1986b,「專業戶家庭特点淺析」,中国婚姻家庭研究会編,『当代中国婚姻家庭』,中国婦女出版
社所収。

趙子祥 (Zhao Zixiang) 他,1984,「離婚的原因多種多樣」,『社会』第2期,22—26頁。

中共中央書記處研究室經濟組編 (Zhonggong Zhongyang Shujichu Yanjiushe Jingjizu),1986,「農村萬元戶發
展情况的調查」,『經濟問題研究資料(一九八三—一九八四年)』,中国財政經濟出版社所収。

中国社会科学院青少年研究所 (Zhongguo Shehui Kexueyuan Qingxiaonian Yanjiusuo),1984,『一九八三年
中国農村青年調查資料』(内部資料)

朱岑樓 (Zhu Cenlou),1986,「中國家庭組織的演變」,朱岑樓編,『我國社會的變遷與發展』,東大圖書公司所収。

(そのだ しげと)

亞東書店

中国当代社会科学名家

自選學術精華叢書
北京師範學院出版社

- 馮友蘭學術精華錄 ■ 2,500円
 - 馮至學術精華錄 ■ 2,500円
 - 張友漁學術精華錄 ■ 2,500円
 - 周谷城學術精華錄 ■ 2,500円
 - 俞平伯學術精華錄 ■ 2,500円
 - 費孝通學術精華錄 ■ 2,500円
 - 梁漱溟學術精華錄 ■ 2,500円
 - 薛暮橋學術精華錄 ■ 2,500円
- (上記金額には消費税は含まれません)

〒101 東京都千代田区神田錦町1-4
☎(03)291-9731/FAX(03)233-2827

※その他、人文社会・自然科学関係の中文図書を
多数取り揃えております。当社発行のカタログ
をご要望の方はご請求下さい。(無料)

内発的発展論から

鶴見和子先生退任記念論文集

一九八八年度上智大学大学院比較社会学ゼミに参加した院生が
発行する自費出版論文集です。鶴見先生の提唱される内発的発
展論の理解のため、また先生の上智大学での活躍ぶりを知る
上でも有益な一冊だと思います。

内容：院生によるゼミ論文 鶴見先生最終講義講義録
内発的発展論文目録 (先生による) 上智大学の思い出
大学院比較社会学ゼミの記録 その他

価格 一五〇〇円

問い合わせ 谷口吉光 (〇四八四七二一八四七六)